

またまた、趣味の進路通信ですが（笑）

◆家に送られてくる旅行会社のパンフレットで初めて知ったのですが、日本有数の米処、越後の地に『日本のミケランジェロとたたえられる名匠がいた』ことを。その名は「石川雲蝶」。江戸時代末期、木彫りや石彫りばかりでなく絵師としても、変わらぬ技量で絵画もこなした。そんな旅行パンフレットに導かれ、新潟県魚沼市へこの冬休みに行ってきました。

”彫りの鬼” 石川雲蝶とは

●酒好きで、ばくち好き。そんな道楽者の一面を持ちながら、ノミを握れば“彫りの鬼”と化す。石川雲蝶は 1814 年、江戸の雑司ヶ谷に生まれた彫工で、江戸彫の石川流に入門、20代で彫物師として名を馳せていた。＜1814 年（文化 11 年）～1883 年（明治 16 年）＞

●雲蝶が越後へ拠点を移したのは 30 代のはじめ頃。現在も金物のまちとして知られる新潟県三条の金物商、内山又蔵との出会いがきっかけだった。

●江戸に出向いた又蔵が、のみの市でノミを見つめていた雲蝶を見かけます。その目の鋭さに又蔵は『よい酒とノミを終生与える』という条件を提示し、雲蝶は話にのり越後に入る。

日本のミケランジェロ「石川雲蝶」が手掛けた彫刻絵画



赤城山西福寺の開山堂内部の彫刻



●室町時代後期、1534 年に開かれた赤城山西福寺。多くの人をひきつける理由は、本堂の隣に位置する開山堂内外に施された石川雲蝶の彫刻、絵画、漆喰細工である。

●幕末の名匠、日本のミケランジェロ「石川雲蝶」が手掛けたこれらの作品は、新潟県文化財に指定されている。日光東照宮にも劣らないほど素晴らしい彫刻であることから、西福寺は「越後日光開山堂」とも呼ばれている。どれも必見の雲蝶作品ですが、なかでも特に「道元禅師猛虎調伏の図」（左写真）は圧巻。＜道元は禅宗曹洞宗の開祖＞

●また、巨大な彫刻の他に、本堂の大廊下の床には、雲蝶の施した埋め木が多数残り、名匠の遊び心をうかがい知ることができる。（上の右写真）

以上 西福寺（開山堂）-新潟県観光協会「新潟観光ナビ」Web ページより

◆雲蝶の作品は、同じ魚沼市にある曹洞宗針倉山永林寺も多く残っている。開山堂の彫刻群は約 5 年の歳月で完成したが、永林寺の彫刻群は 15 年以上の歳月がかかったようだ。今年の夏休みには、もう一度越後に訪れ、永林寺に行こうと思う。

◆大阪市立天王寺美術館「メトロポリタン美術館展」忘れてたあ！16 日（日）まで